

教室環境づくりの方法やプロセスを学ぶ授業実践の
試み：
多目的保育施設「たけのこ」の室内装飾制作を通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-06-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 智子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007354

教室環境づくりの方法やプロセスを学ぶ授業実践の試み

～多目的保育施設「たけのこ」の室内装飾制作を通して～

A Trial of Practice to Learn the Methods and Processes of Creating an Environment in the Classroom
Production through the Decoration of the "TAKENOKO" of Childcare Facilities

高橋 智子

Tomoko TAKAHASHI

（平成24年10月4日受理）

1. はじめに

近年、社会の大きな変動や子どもたちを取り巻く環境の変化を背景に、教員にはより高い専門知識や指導力などの資質や能力が求められている。文部科学省中央教育審議会が取りまとめた「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」（平成24年8月28日）では、グローバル化や情報化、少子高齢化などの社会の急激な変化や高度化、複雑化する諸課題への対応の必要性が示されている。また、こうした現状と課題の中で、これからの教員に求められる資質能力として、1. 教職に対する責任感、探究力、教職生活を通じて自主的に学び続ける力（使命感や責任感、教育的愛情）、2. 専門職としての高度な知識・技能、3. 総合的な人間力（豊かな人間性や社会性、コミュニケーション力、同僚とチームで対応する力、地域や社会の多様な組織等と連携・協働できる力）が明示された。

求められている人材育成のため、教員養成課程では、大学の組織編成およびカリキュラム改革を実施してきている。学部レベルでは、学校現場での体験の充実を目指したカリキュラムの改善が求められており、来年度から導入される「教職実践演習」（必修）は、その視点を持った授業科目として注目されている。また、静岡大学教育学部の教員養成課程では、教科専門と教科教育の教員が連携して実施する「教科内容指導論Ⅰ・Ⅱ」（必修）の導入が行われ、現在実施されている。このようなカリキュラム改革を通して、学生が学部4年間で教員に必要な資質能力を体系的に育んで行くことが教員養成課程に求められている。

静岡大学教育学部では、中・高等学校教員免許状（美術）取得のために必修および選択とされている専門教育科目である「教職に関する科目」は全部で18科目あるが、教科教育（美術）の教員が担当する科目としては「美術科教育法Ⅱ」「美術科教育法Ⅲ」「美術科教育法Ⅳ」「美術教育研究」¹⁾「教職実践演習（H25年度後期より実施）」²⁾があげられる。「教職に準ずる科目」としては、「美術科教科内容指導論Ⅰ」「美術科教科内容指導論Ⅱ」があげられる。免許状の種類により、必要単位数が異なってくるものの、中・高等学校教員免許状（美術）取得を目指す学生は、これらの授業科目を全て受講可能である。この授業科目の目標および学習内容は図1に示す通りである³⁾。これらの授業科目を系統的に学んでいくことで、教員として必要な資質能力を育んでいくこととなる。しかし、現カリキュラムの中でも、時間数などの関係で十分に

学びを深められない学習内容があることも確かである。

先の答申に示された資質能力のうち、2では、教科や教職に関する高度な専門知識や新たな学びを展開できる実践的指導力はもちろんのこと、教科指導や生徒指導さらには学級経営などを的確に実践できる力などもあげられており、教員養成段階において幅広い力の育成が今後求められていることが分かる。

本稿では、これまで実施している授業内容に加え、教科や学級経営にも重要な関わりのある教室環境づくり⁴⁾に着目していく。教室環境づくりに関しては、授業や学級経営に関わる重要な事項であるにも関わらず、これまで担当授業内で具体的に取り上げることができなかった⁵⁾。しかし、実際に静岡県初の任者研修資料⁶⁾の「第4節学級経営」の中では、教室環境の整備に関して例をあげながら、その重要性について述べられている。また、近年教員として新規採用となる卒業生の動向を見てみると、初任で担任を受け持つことが多く、赴任後に授業だけではなく、教室環境づくりを含めた学級経営に携わる状況にあるといえる。教室環境づくりは、授業づくりや学級経営と切り離されるものではなく、これらの検討を通して、学生の授業づくりに対する視野の拡大も期待できるといえる。

そこで、本稿では、授業や学級における教室環境づくりに着目し、学生がその環境づくりの方法やプロセスを学ぶための授業提案を行い、その成果と課題を報告するものとする。なお、授業については、平成23年度前期に実施されたものを対象とする。

2. 教室環境づくりについて

教室内の環境づくりを考える際、ハード面とソフト面が考えられる。つまり建築時に規定される物理的な面とその後それをどのように活用していくかという面である。前者に関しては、「教室等の室内環境の在り方について」(中間報告)⁷⁾の中で、教室の良好な環境確保方策を中心に検討が進められている⁸⁾。本実践で着目するのは、後者である。既に与えられているハードの側面を踏まえながら、一定の条件下で、いかに教室環境を充実させていくのが課題となる。この充実のためには、例えば新たな機材や機器の設置や学習機の配置など様々考えられるが、今回は手づくりの装飾および掲示を取り上げることとする。受講生が教室環境づくりの必

授業科目名	対象学年	学期	目標	学習内容
新課程 に 関 する 科 目	美術科授業法1	1	美術科教育の意義と役割を認識し、授業計画の作成に資する。	美術科教育の意義、役割 授業計画の作成について の理解を深める。
	美術科授業法2	2	現代社会における美術教育の役割を認識し、授業の工夫を 実践し、その効果的な実施方法について学ぶ。	授業の工夫と実践 デジタルツールと教材作り の活用方法を学ぶ。
	美術科授業法3	3	職業教育としての美術科教育の意義について理解を深める。	職業教育としての 美術科教育の意義を学ぶ。
	美術科新課程	4	新課程の学習目標の達成に向けた授業計画の作成と実践を通して、 美術科教育の意義と役割を認識する。	新課程の学習目標の達成に向けた 授業計画の作成と実践 授業計画の作成と実践 授業計画の作成と実践
新課程 に 関 する 科 目	美術科新課程 の芸術鑑賞	1	芸術鑑賞の意義と役割を認識し、授業計画の作成に資する。	芸術鑑賞の意義と役割 授業計画の作成について の理解を深める。
	美術科新課程 の芸術鑑賞	2	芸術鑑賞の意義と役割を認識し、授業計画の作成に資する。	芸術鑑賞の意義と役割 授業計画の作成について の理解を深める。

図1 教職に関する科目および教職に準ずる科目(美術)に関する目標および学習内容の一覧表:平成24年度



図2 教職に関する科目および教職に準ずる科目について

要性や条件を考えながら創意工夫を行い，装飾や掲示の制作を通して，子どもたちに適した多様な教室環境を創出する力を育むことを目指す。

3. 授業実践について

(1) 「アートとコミュニケーション」の位置づけ

前述したように，現在中・高等学校教員免許状（美術）取得のために，教科教育（美術）の教員が担当している「教職に関する科目」は4科目（「教職実践演習（H25年度後期より実施）」は除く），「教職に準ずる科目」は2科目である。「教職に関する科目」について，「美術科教育法Ⅱ」では，美術教育の意義を押さえながら，中学校美術科の目標や内容を理解し，授業づくりの基礎を学んでいき，その後「美術科教育法Ⅲ」「美術科教育法Ⅳ」では，教材開発および教材研究や模擬授業を行いながら，授業過程における指導方法についてさらに学んでいく。「美術教育研究」では，学生自身が教育実習での課題を踏まえながら，附属中学校と連携授業を通して，年間指導計画を踏まえた教材の系統性や生徒の実態把握などを意識した授業づくりに取り組んでいる⁹⁾。「教職に準ずる科目」については，「美術科教科内容指導論Ⅰ」「美術科教科内容指導論Ⅱ」ともに，教科専門と教科教育の教員がオムニバスで授業を担当し，教材開発および教材研究，模擬授業の実施やディスカッションなどに取り組んでいる。一連の授業科目に加え，平成23年度より新たに「教職に準ずる科目」として「アートとコミュニケーション」の授業が開講されることになった。この授業は教科専門と教科教育の教員で担当することになり，「美術科教育法Ⅱ」，「美術科教育法Ⅲ」，「美術科教科内容指導論Ⅰ」を学んだ後の3年・前期に開講されることになった（図2）。この時期は，3年生の教育実習が実施されるため，こうした経験と合わせて，さらに課題を明確に持ち，教室環境づくりについて学びを深めていくことができるものと考えた。

(2) 授業の概要

「アートとコミュニケーション」は，平成23年度より，「教職に準ずる科目」として新しく開講され3年・前期（選択）に実施されている科目である。対象者は，主として教育学部の学生

である。

1) 授業担当者

授業は、教科専門と教科教育の教員2名が担当した。授業を前半と後半に分け、それぞれを各教員が分担して担当することになった。教室環境づくりに関する授業内容は、後半に位置づけ、教科教育の教員が担当することとなった。

2) 授業目標

本授業は、アートやデザインの特性を生かしたコミュニケーションのあり方を考えるとともに、そのコミュニケーションを促す環境づくりの視点を学ぶことをねらいとした。後半では、前半の授業内容を踏まえ、受講生自ら教室環境づくりの計画・制作を通して、その方法やプロセスを学んでいくことを主なねらいとした。

3) 受講生の傾向

平成23年度の受講生の学部および専攻・専修一覧、受講生数については、図3に示した。全受講者数は、46名であった。当初、受講生の多くが、美術教育専修の学生および美術・デザイン専攻の学生であると予想していた。実際の受講生の内訳は、受講生の約65%は美術教育専修および美術・デザイン専攻の学生であった。それ以外には、幼児教育専修や家庭科教育専修、英語教育専修、音楽教育専修からの受講や人文学部からの受講もあり、受講生は様々な教科や専門を学んでいる学生から構成されることになった。様々な専攻・専修の学生が受講するため、教室環境づくりに対してそれぞれの専門性を生かしながら、広い視点から学びが深まることが期待された。

4) 多目的保育施設「たけのこ」の活用

本授業では、教室環境づくりの計画・制作を行うために、静岡大学構内の多目的保育施設「たけのこ」と連携を行うことになった。「たけのこ」は、学内保育ニーズ調査の結果をふまえて、平成23年4月に開設された一時保育を主な機能の一つとした学内施設である。一時保育の対象児は、生後8週間を経過した乳児から小学6年生までの児童である。一時保育の利用としてだけでなく、男女共同参画に関する会議や打ち合わせなどの場としての利用のある施設でもある。

連携のきっかけは、男女共同参画推進室の担当教員より、「たけのこ」の内部装飾に関する相談および依頼を授業者が受けたことであった。「たけのこ」は「アートとコミュニケーション」の授業開講と同じ年度に開設され、その運用が始まって間もない施設であったため、その室内の装飾や掲示などが十分に行われておらず、子どもが利用する室内環境としては多くの課題を抱えていた。こうした現状を受け、少しでも利用する子どもの心が和み、喜ぶような装飾を行いたいという担当教員の願いから「たけのこ」の室内装飾の依頼を受けることになった。本授業では、想像上の教室を設定して環境づくりの立案を行うのではなく、実際の教室を活用し計

学部	人文学部	教育学部					
		学校教育教員養成課程					芸術文化課程
課程など	社会学科	幼児教育専修	音楽教育専修	美術教育専修	家庭科教育専修	英語教育専修	美術・デザイン専攻
受講人数	1名	6名	1名	17名	5名	3名	13名
全受講人数	46名						

図3 「アートとコミュニケーション」受講者数一覧

画・制作を行いたいと考えていたため、「たけのこ」の室内装飾と本授業のテーマである教室環境づくりをリンクさせて、学生の学びにつなげていこうと考えた。こうした経緯から、多目的保育施設「たけのこ」との連携を通して、教室環境の計画・制作を行うことになった。「たけのこ」の担当教員の願いや教室の条件などを理解・把握し、室内装飾を計画・制作することを通して、教室環境づくりの方法やプロセスを学んでいくこととなった。

(3) 授業計画

本実践は、「アートとコミュニケーション」の授業後半（全8回）で実施した¹⁰⁾。日程および授業計画と学習内容などの詳細は図4に示した。授業は、6月上旬から開始し、全8回の計画で進めていった。授業回数が通常授業数の半分であるため、より計画的に授業を進めていく必要があった。そのため、授業の始めに受講生に対して資料を配布し、授業目標および計画の確認を行った。また、本授業では、教室環境づくりの方法やプロセスを学ぶために、図5に示したプロセス（活動）を授業内に意図的に組み込んでいった。このプロセスを授業過程に意図的に組み込んだ背景には、以前実施した授業からの反省があったためである。

これまで、小学校教員免許状取得のために必要な授業科目「図画工作科教育法Ⅰ」においても、教室環境づくりを課題として取り上げた事があった。課題テーマは「自分の考える理想の教室環境（図工室）を提案する」というものであった。課題提示の際、受講生が問題意識を持ちそれを追求するための手掛かりが必要であると考えたため、ある学校の図工室の見取り図（教室内の工夫について文字による説明およびイラストあり）を参考資料として配布した。この配布資料をもとに、受講生が図工室の教室環境に対する自分なりの問題を発見し、その解決策（図工室の教室環境の提案）を追求する姿を期待した。しかし、実際に受講生から提出された課題の中には、現実的には計画および実施が困難な提案が多く見られた¹¹⁾。このような提案が多く見られた原因としては、課題の条件を絞りきれていなかったことや思考過程などを詳細に設定していなかったことがあげられる。つまり、課題の自由度が高かったために、教室のハード面とソフト面の両側面から解決策を模索しているものや現実的には実施不可能な提案を行っていた受講生が多く見受けられた。受講生の課題に対する問題意識が現実的でないことに

授業日程・回数	授業計画	学習内容	学習形態	準備物	実施場所	
1 6/6	・授業目的、内容、計画の説明 ・「たけのこ」の見学 ・「たけのこ」担当教員との交流	・授業目的、内容、計画の理解 ・「たけのこ」の担当教員の願いや教室条件の把握	個人	・ガイダンス資料 ・ワークシート (個人用)	6004教室 たけのこ	
2 6/13	・個人案の発表 ・グループディスカッション①	・目的や条件に合った発想、アイデア ・自己発表	共同	・ワークシート (グループ用) ・プレゼンテーション資料	6004教室	
3 6/20	・グループディスカッション② ・プレゼンテーション準備①	・発想を表現する創意工夫 (材料、用具、技法など) ・制作の構想			6001教室	
4 6/27	・プレゼンテーション準備②	・伝えたいことを分かりやすく伝える (資料作成)			6004教室	
5 7/4	・プレゼンテーション本番	・伝えたいことを分かりやすく伝える (発表方法) ・コンセプトの理解			・各グループの発表資料およびパワーポイント	たけのこ
6 7/11	制作①	・発想を表現する創意工夫 (材料、用具、技法など) ・制作手順 ・共同してつくる			・材料・用具の検討資料	たけのこ
7 7/19	制作②					たけのこ
8 7/25	制作③					たけのこ

図4 アートとコミュニケーション（後半）の授業計画と学習内容（平成23年度 前期）

加え、それが深められておらず、単なる自由な想像をもとに構想された提案に留まることになった。

こうした反省点を踏まえ、本実践ではデューイ (Dewey, J, 1910) の人間の問題解決過程を参考¹²⁾にして、図5に示したような問題解決のためのプロセスを授業内に意図的に組み込んだ。受講生が目的意識や問題を明確に持ち、それを解決する方法を追求できるプロセスと学習形態および環境を整えた。

また、テーマについては、「たけのこ」の室内を分割し、各自が思い思いのテーマで装飾するのではなく、全体で一つのテーマを掲げ制作を行うことを目指した。統一テーマを設けることで、各学生の課題の捉え方や考え方の違い、思いやそれを形にする方法などが顕著に表れると考えたからである。それぞれの視点を受容、理解、判断することを通して、学生の学びが深まることを期待した。



図5 「アートとコミュニケーション」の授業過程

(4) 学習形態

学習形態には、図4および図5で示したように個人（前半）の活動と共同の活動（後半）を取り入れた。共同の活動では、授業者が前もって受講生を6グループに振り分け（1グループ：7～8名）、様々な専攻・専修の学生が相互交流できるような混合グループを編成した。グループ活動を通して、学生が課題に対する多角的な捉え方や視点に気づき、問題解決に向けて試行錯誤しながら課題を追求していくことができると考えた。中学校学習指導要領解説美術編の中でも「共同で行う創造活動」は、生徒がお互いのよさを認めたり各自が学んだことを共有化したりする観点から、その重要性が指摘されている¹³⁾。受講生一人一人が、個別に課題に取り組むのではなく、相互に交流しつつ学びを深めていく学習形態を設定することで、「共同で行う創造活動」の意義についても、受講生が実感を持って考えることができると考えた。

(5) 授業内容

具体的な授業内容について、図5に示した授業過程に沿って以下から詳しく述べていく。

1) 目的理解

まず初回の授業で、①授業の開講日・時間、②担当教員、③使用教室、④授業目標、⑤授業内容（概要）、⑥授業内容（詳細）、⑦授業計画、⑧グループ分けなどを記載した資料を配布し、受講生全員で授業目的および内容について理解を深めた。同時に、多目的保育施設「たけのこ」の紹介を行い、本授業では受講生自ら「たけのこ」の室内装飾の計画・制作を通して、教室環境づくりの方法やプロセスを学んでいくことを確認した。「たけのこ」の紹介には、パンフレットを用い、さらに「たけのこ」の教室状況を写真で複数枚提示（パソコンによるプレゼンテーション）などとして、受講生が施設のイメージを広げることができるよう工夫した（図6）。

2) 課題発見

「たけのこ」の室内装飾の計画・制作にあたり、受講生による能動的な課題発見を促すために、初回の授業時に受講生全員で「たけのこ」を訪問し、施設の見学および担当教員と交流する機



図6 「たけのこ」の室内の様子（右下:外観，右左上および左下:室内の様子）

会を設けた。本実践では、「図画工作科教育法Ⅰ」での反省を踏まえ、実際に教室に足を運び、自ら課題を発見し問題意識を明確に持つ場面を設定した。「たけのこ」の見学では施設のハード面の特徴や条件の理解，装飾を行う室内のスケール感を実感することを目的とし，担当教員との交流では教員の室内環境への願いや要望を理解することを目的とした（図7）。また、「たけのこ」の見学および担当教員との交流の際，受講生が室内装飾に対する課題をより明確化できるようにワークシートを活用した（図8）。ワークシートは，コンセプトとアイデアスケッチ用の2種類を準備した。コンセプト用紙は，「ねがい」「問題点」「キーワード」「条件」「コンセプト」「具体的キーワード」の項目を関連性づけながら書き込みができるようになっており，アイデアスケッチ用紙はコンセプト用紙のように記入枠を設けず絵や文字を自由に用いて書き込みができるようになっている。「たけのこ」訪問では，まず「ねがい」「問題点」「条件」の記入を個人で行った。担当教員との交流で理解・把握した施設や子どもへの願いを「ねがい」の部分に記入し，「問題点」には「ねがい」の実現のために現在の室内環境の実態（問題点）を教室環境の観察を通して分析し記入を行った。また「条件」の部分には，先の「ねがい」や「問題点」に合わせて，必要となるハード面などの制限や配慮すべき事項について考察し，記入していった。この3項目を関連づけて記入することにより，「ねがい」や「問題点」，「条件」をより明確に意識しながら，教室環境づくりのコンセプトを検討していくことが可能となる。

実際に、「たけのこ」の見学を通して，受講生が具体的に教室の実態やスケールなどを理解することができたことは確かである。ワークシートを活用しながら，担当教員の「ねがい」を直接聞き，それに対する教室の「問題点」について教室内の観察を通して分析している様子が見られた。また，受講生全



図7 受講生が「たけのこ」を訪れ担当教員と交流している場面

多目的保育施設「たけのこ」の教室環境づくり

The diagram is a concept map with five rounded rectangular boxes. On the left, there are two boxes: 'ねがい' (Wishes) at the top and '問題点' (Issues) at the bottom. A vertical line connects them, and a horizontal line extends from the center to a central box labeled 'キーワード' (Keywords). From the 'キーワード' box, a vertical line goes down to a box labeled '条件' (Conditions). To the right of the 'キーワード' box, a horizontal line connects to a large box labeled 'コンセプト' (Concept). From the bottom of the 'コンセプト' box, a vertical line goes down to a box labeled '具体的キーワード' (Specific Keywords).

ねがい

キーワード

コンセプト

問題点

条件

具体的キーワード

チーム名 学籍番号 氏名

多目的保育施設「たけのこ」の教室環境づくり

This page is a blank workspace for sketching ideas, with a large empty area in the center. At the bottom, there are three fields for identifying the user: 'チーム名', '学籍番号', and '氏名'.

チーム名 学籍番号 氏名

図8 アートとコミュニケーション 個人案用ワークシート（上：コンセプト用紙 下：アイデアスケッチなど）

員が「ねがい」「問題点」「条件」の各項目について、ワークシートを活用し書き込んでいった。特に「条件」については、担当教員からの一方的に話を聞くだけでなく、受講生から積極的に担当教員に質問する姿が見られた。担当教員に質問するという行為は、「ねがい」や「問題点」をもとに、受講生の中に多くの問いが生まれてきていることを示すものである。こうした積極的な姿から、受講生の問題意識の高まりを感じることができた。質問内容は、制作時に使用できる壁面の範囲（天井を含む）や掲示物の壁面への貼り付け方法など幅広いものであった。また、デジタルカメラや携帯電話のカメラ機能を利用し室内の画像を自主的に記録している学生も多くいた。施設を訪問し現場の願いや課題を直接的に把握することで、受講生の問題意識が高まったことが、こうした姿から感じることができた。

3) 発想・構想

発想・構想の段階では、施設見学で明確にした室内装飾への「ねがい」や「問題点」、「条件」をもとにキーワードを抽出した後、室内環境の「コンセプト」について検討し、それに関係する具体的キーワードをあげていった。この一連の検討作業は、授業外の個人課題とした。この後、グループ活動を設定しているため、「たけのこ」を訪問することで明らかになった「ねがい」や「問題点」、「条件」をもとに、まずは個人で十分な検討を行い、自分の考えを明確に持つことが重要であると考えた。この段階では、受講生一人ひとりが目的や条件などに基づき、自分の発想を自由に広げている姿が多く見られた。

4) 追求・発展

個人で検討した原案をさらに追求・発展させるために、グループ内での個人発表を設定した。発表では、コンセプト用紙の項目に沿って説明を行いつつ、適宜アイデアスケッチの提示を行うなど、分かりやすい説明を求めた。個人発表を通して、テーマに対するメンバーの考えや自分との視点の相違・共通項などに気づくことで、受講生の教室環境づくりに対する視野の広がり期待した。個人発表後は、各メンバーの案をもとに、グループ内でのディスカッションを行い、グループでひとつの原案を作成させた。ディスカッションを通して、「たけのこ」の室内装飾に対するグループの「ねがい」や「問題点」、「条件」を明確にし、室内装飾について、グループ内でさらに検討を重ねていった。個人でも様々な案が出ていたが、グループ内でそれらをさらに検討することにより、色々な考え方や視点に気づき、それを互いに受容しながらよりよい案の提案を目指していった。また、掲示に使用する素材や方法に関してヒントになる参考資料（文献）の提示も行った¹⁴⁾。

メンバーの原案および参考資料(文献)をもとに各グループが提案したコンセプトと掲示テーマを図9と図10に示した。特に、掲示テーマやその内容(図10)については、図9にある一連の過程(目的理解、課題発見、発想・構想など)を押さえていたため、先の「図画工作科教育法I」の授業での実現不可能な提案や単なる自由な想像をもとに構想された提案は見られなかった。対象となる子どもへの願いや教室の問題点や条件を意識しながら、掲示テーマや内容の検討を行っている様子が窺えた。掲示内容(「何を」)を検討するだけでなく、目的(「何のために」)を押さえながら掲示内容(「何を」)を考える思考過程は、教室環境づくりだけでなく、授業づくりにおいても同様に重要な視点となるだろう。

「たけのこ」の室内装飾では、統一テーマを設け、制作を行うことを目指していたため、ここで検討したグループ案(図10)については、全グループが「たけのこ」の担当教員の前でパソコンを用いた10分間のプレゼンテーションを行い、その後、担当教員が各グループの原案か

グループ	ねがい	問題点	条件	キーワード	コンセプト	期待キーワード
A	対象は幼児から小学校6年生。明るくて子どもが楽しくなるような空間。様々な色や素材を用いる。季節感を取り入れてもよいが、通年で使用できるもの。子どもがまた来くなるような思い出のこるような工夫を行う。	寒色系が多く子どもらしい空間でない。窓の周りが無機質で外から見た際、どういった施設が分からない。遊ぶ要素が少ない。	安全性が確保できるような素材を使う。通年使用できる。物の移動制限あり。	【施設側】幼児対象、通年、安全、楽しい、明るい 【オリジナル】物語性、ファンシー、期待感、子ども参加型	「子ども達が純粋に楽しめる空間を創る」施設側のねがいや問題点からあげられたキーワードをもとに、子ども達が明るく楽しく遊べる参加型の空間創りを目指す。	楽しい、明るい、子ども参加型、安全、通年
B	楽しい気分になるような雰囲気（緊張が和らぐように）。10カ月～小6まで幅広い年齢が対象。窓からみて保育施設だとわかるようなデザイン。	スペースが有効に活用されていない。掲示物がないので、さみしい感じになっている。色みが少ない。	壁に穴をあけない。TVを動かさない。安全性に配慮する。	通年使用可能、カラフルさ、たけのこ、自然	子どもと一緒に作りあげる。たけのこらしさを取り入れる。開放感あふれる保育室。音がたけのこ、動いたりして、見ていて楽しい掲示物。	花、空、野原、動物、グラデーション、たけのこ
C	幅広い年齢層に対応。子どもが楽しい気分になり、緊張を和らげるようにする。夢を育む場になるように。通年対応できる空間（掲示）。たけのこを知らない人がみて、何のための施設であるか分かるようにする。	遊べるものや色みが少なく、殺風景。無機質で圧迫感のある印象。静岡大学の自然豊かな環境の中にあるという特徴を生かして欲しい。	子どもの安全性に配慮する。通年使用できる。壁を傷つけない。耐久性のある素材を使用する。	夢、希望、楽しさ、空間的な広がり、冒険心	現状の殺風景で無機質な空間では子ども達が楽しく遊ぶことができない。そこで、子ども達が圧迫感や緊張感を感じずに遊ぶことができる空間が必要である。子ども達が夢や希望を持ち、思わず冒険したくなる絵本やアニメのような不思議な空間、いつまでも心の中に残り続ける「たけのこ」を目指す。	空、海、船、ロケット、恐竜、木、遊具、動物、音楽、汽車、太陽、星、月
D	施設に入ってきた子どもが楽しい気分になる。一日楽しく遊べる。外から見て、保育施設だと分かる。幅広い年齢層に対応。オールシーズン使用できるものだが、季節感もほしい。新生児から小6までが対象。	掲示可能な白い壁部分は、身長低い子が近くから掲示を楽しむことができないため、掲示物はある程度の大きさがほしい。天井には空調機能があり、天井の広い範囲にわたり設置されている。	子どもの安全性（スポンジや下に長く垂れてしまうものはNG）。掲示は、剥がせる両面テープで行う。	子どもの想像力、季節感を感じるモチーフ、自然、遊園地	この空間にいて、「楽しい気持ちが続いていきますように」という思いを一番のコンセプトとする。子ども達が想像力を養うきっかけをつくる施設環境であること。	抽象化した物体、空、森、メリーゴーランド、季節ごとの掲示(春、夏、秋、冬)。
E	緊張が和らぐような楽しいもの。外から見て保育施設だと分かるような子どもらしいもの。楽しく一日過ごせる。オールシーズンの対応。ファンタジーな世界。幅広い年齢の子どもに対応。	壁が白く、殺風景。おもちゃや絵本が少ない。壁への接着に課題があり。	安全性を考慮する。壁になるべく傷をつけない。一年を通して使用可能なもの。	楽しい、カラフル、昔話、竹。	竹林に囲まれた「たけのこ」の教室環境づくりにあたって、子ども達が竹のように真っ直ぐにすくすく育ってほしいという願いを込める。また、絵本が少ないという問題点から、子ども達が童話に触れることができるようにかぐや姫をモチーフに選択。子ども達が一日楽しく遊び過ごすことができ、子ども自身が「たけのこ」の空間をつくることのできるような環境提案を行う。	竹、かぐや姫、ボタンの木。
F	幅広い年齢の子どもが対象。外から見て、保育施設だと分かる。オールシーズンに対応。緊張が和らぎ、楽しく遊べるような空間。	白い壁が広く、寂しい感じ。楽しい雰囲気はない。遊具の道具が少ない。本が古い。創造力を育むような環境でない。	安全性。TVは動かさない。耐久性のある材料。ガムテープは使用禁止。	ワクワクする。楽しい空間、オールシーズン、教育的要素。	様々な絵本の世界や風景・キャラクターを取り入れることにより、楽しい空間をつくってきたい。空間から子ども達の好奇心を刺激し、想像力を育てていきたい。また、教育的な要素も取り入れていきたい。	絵本の世界、子どもの、子どもの好きなもの、教育的なもの、季節

図9 各グループの「たけのこ」室内装飾コンセプト

グループ	掲示テーマ	コンセプトおよび内容	素材	要素
A	「うさびーとかめつきーのワクワク♪冒険ファンタジー」	ゲームを取り入れ、子どもが掲示に関わりながら、一緒に室内空間を作り上げていく掲示を提案する。遊ぶことで、思い出に残り、また来たいと思える空間にする。うさびーとかめつきーというキャラクターを設定し、その2人が友人からパーティーの招待状を受け取る設定。その招待状に書かれていたテーマを解決し、パーティーに参加するため2人の冒険をスタートする。掲示全体がすくすくゲームになっており、遊びながら、子どもが掲示を楽しめるようになっている。	画用紙、フラワーペーパー、ラミネート、磁石、モール、ハニカムシート、セロファン	キャラクター物語参加型ゲーム
B	「たけのこの里」	たけのこからイメージを広げ、見ていても楽しく、さらに音が出たり動いたりする掲示物を作成する。全体は森の中のようなイメージ。「たけのこの里」に住む色々な動物や自然を登場させ掲示物を作成する。子どもが掲示物を作る活動も取り入れ、子どもと共に掲示を完成させていく。窓にはたけのこのイラストに顔をはめ込んで遊べる箇所も作成する。天井は、空と虹をイメージしたデザインにし、音がでるモビールを設置する。	模造紙、色画用紙、フラワーペーパー、画紙、両面テープ、ラミネートシート、スズランテープ、オーロラシート、蛍光シート、モール、綿、タコ糸、ボンド、ビス	キャラクター参加型色彩豊か
C	「冒険の国へ」	子どもが夢や希望を持ち、思わず冒険したくなる絵本やアニメのような不思議な空間、いつまでも心に残り続ける「たけのこ」という場所を提案する。「たけのこっぴー」というキャラクターと共に、夢の世界、冒険の海、富士山、音楽の世界を冒険する掲示物を作成する。掲示のモチーフには、冒険から想像できるもの（船やロケットなど）や楽しさを感じさせるもの（動物や音楽など）、身近な自然（虹や太陽など）を用いる。仕掛けをつくるなどして、子どもが掲示に関われるようにする。	色画用紙、モール、スズランテープ、セロファン、アルミホイル、フェルト、ハニカムシート、プチプチシート、紐	キャラクター物語参加型
D	「Merry go round in the imagine forest—子どもたちの想像を育むメリーゴーランドの森」	「楽しい気持ち」が続く空間づくりを目指す。キーワードは、メリーゴーランド。メリーゴーランドをテーマに遊園地のようなワクワクするような楽しさのある掲示を行う。様々なキャラクターがメリーゴーランドに乗っている場面を壁面に作成する。また、抽象的な形による表現を多用し、子どもがそれを何かに見立てていくことで、子どもの想像力を養い、豊かな感性を伸ばしていくきっかけをつくりたい。壁面や窓には季節感を取り入れたものにする。	段ボール、画用紙、タコ糸、スチロール、セロファン、フェルト	季節感抽象形
E	「子どもが作って遊ぶ竹林」	竹林に囲まれた保育施設「たけのこ」の教室環境をつくるにあたり、子ども達に竹のように真っ直ぐすくすくと育ってほしいという願いをこめた。また、絵本が少ないという問題点から、子どもが童話に触れることができるようにかぐや姫をモチーフに選んだ。子どもが一日を楽しく遊び過ごすことができ、子ども達が「たけのこ」の空間をつくることのできるような教室環境を提案する。かぐや姫の物語をベースとして、「たけのこ」での子どもの写真を壁面に掲示する部分や子どもが遊べるデザインを構想する（ボタンかけや三つ編み、キャラクター探しなど）。窓にも装飾を行い、鳥や「たけのこ」の文字を配置する。子どもが身長を記録できる「すくすく竹（身長計）」なども設置し、子どもが遊びながら関われる内容とする。天井には、	色画用紙、色鉛筆、セロファン、布、マジックテープ、毛糸、リボン、ボタン、フェルト	物語参加型
F	「おとぎの世界へこんにちは☆☆☆」	様々な絵本の世界や風景・キャラクターを取り入れることにより、楽しい空間をつくっていく。こうした空間から子どもに対する興味や好奇心を刺激し、想像力を育てていく。わくわくする要素として様々な「絵本の世界（童話など）」を壁面に取り入れ、楽しい空間にするために「キャラクターの使用」、オールシーズン対応できるものとして「季節の木（四季それぞれを表す木を作成）」、教育的な要素として「英単語・アルファベット」を使用する。また、子どもが参加して楽しめる要素（カレンダーや時計など）の工夫も行う。	色画用紙	キャラクター物語参加型

図10 各グループの「たけのこ」室内装飾原案

ら「たけのこ」の室内装飾案として最も優れているものを統一テーマとして採用することとした。各グループはプレゼンテーションに向けて、自分たちの提案や思いを分かりやすく伝えるために、説明の仕方やプレゼンテーション作成について工夫（絵や写真、文字など）していった。グループ発表においても、個人用と同形式のワークシートを使用しており、発表時には受講者全員に資料として配布を行った。

プレゼンテーション終了後には、担当教員による評価（コメントなど）を行い、受講生が自分たちの提案について発表や評価を通して振り返る機会を設けた。各グループのプレゼンテーションに対する担当教員の評価（後日）が、図11である。担当教員がA～Fグループの提案に対して、それぞれの良さを認めていることが分かる。授業当初は、各グループの原案から最も優れている案の一つを選択して、それを室内装飾のテーマとする予定であった。しかし、担当教員からは全グループの提案に魅力的な部分があるため、各グループの良いアイデアを融合させた室内装飾にしたいという要望があった。メインテーマとして採用されたのは、Cグループの

2011.7.4 (Mon.)

チーム	コメント
A	Aチームは、コンセプトだけのプレゼンでしたが、オリジナルのキーワードの中に「物語性」「子供達参加型」という言葉があるので、具体的な装飾の内容が楽しみです。
B	子どもの絵を貼ったり、鈴を使って音を出したり、他のチームにはない発想がありました。 また、窓には子どもが「たけのこ」から顔をだすことができる飾りがあったり、子どもも参加できるタイプの装飾は楽しさいっぱい、素晴らしいですね。 壁と天井を全て色画用紙で装飾してしまうと、火災時など難燃性の壁紙が隠れてしまい、少し問題があるかもしれませんね。
C	「たけのこっぴー」は、とてもかわいいキャラクターですね。いろんなところで、このキャラクターを使わせていただけませんか？ 飾り付けのコンセプトが「冒険の国」ということで、他のチームにはない要素が入っていました。 宇宙船や汽車に乗って、どこへ行くのだろうかという冒険心をくすぐられる感じがします。 子どもが眺めるだけでなく、もう少し子どもも参加できる内容があれば、もっと良くなると思います。
D	四季の移り変わりを木々の葉で表現しようとするところ、「抽象的なカタチ」を使って子どもの想像力を駆り立てようとは、とても面白いと思いました。 一方で、全体的にファンタジックな感じなので、男の子に受け入れられるか、少し気になりました。 メリーゴーランドなので、窓などを使って、少し動きが出せるようにしても面白いかもしれませんね。
E	「かぐや姫」とは、「たけのこ」からの連想で面白いですね。 切り株型の収納ポケット、竹をめくると出てくる動物など、遊び心がいっぱい入っていて楽しい内容となっていると思います。 また、子どもが手を動かして遊ぶ飾りは、子どもの発達のうえでも役立つので、Eチームの発想には感心しました。
F	「4本の木」がシンボルとなって四季を表現したり、色々な物語からキャラクターが出てきたり、眺めていて楽しい気分になってくれます。 物語の中へ子どもも参加できるような内容があれば、さらに素晴らしいものになったと思います。 「教育的要素」がコンセプトに入っていて、英単語やアルファベットが取り入れられていますが、保育者の英語の知識が分からないので、英語は避けて、日本語でさまざまな物を表現する方が良いかもしれませんね。

男女共同参画推進室（的場、戸塚）

図11 各グループのプレゼンテーションに対する「たけのこ」の担当教員からのコメント

	採用されたアイデア	キーワード
A	・魚のうろこをめくると様々なモチーフが隠れている仕掛け	しかけ
B	・たけのこの顔出し ・窓への「たけのこ」文字貼り付け	体験・遊び
C	・テーマ	コンセプト
D	・抽象形のモチーフ	見立て
E	・ボタンの木 ・三つ編み	体験・遊び・学び
F	・日めくりカレンダー ・フラワー時計	体験・遊び・学び

図12 採用された各グループのアイデア一覧

案であったが、それに加え、他グループのアイデアが必ずどこかに用いられるかたちとなった。各グループの採用されたアイデアとキーワードを図12に示した。このアイデアを融合した最終案が、図13である。この作成は、メインテーマとして選ばれたグループの学生に依頼した。各グループの分担については、授業者と図13を作成した学生とで協議し決定していった。各グループには、図13の全体構想図の他にも担当部分（イラスト）を拡大したものに制作のポイントを記載したプリントを配布し、全体イメージと役割分担を確認していった。室内装飾のテーマは、「たけのこ」を訪れた子どもが、キャラクター「たけのこっぴー」（図14）と一緒に冒険の旅を行うというものであった（図10のCを参照）。

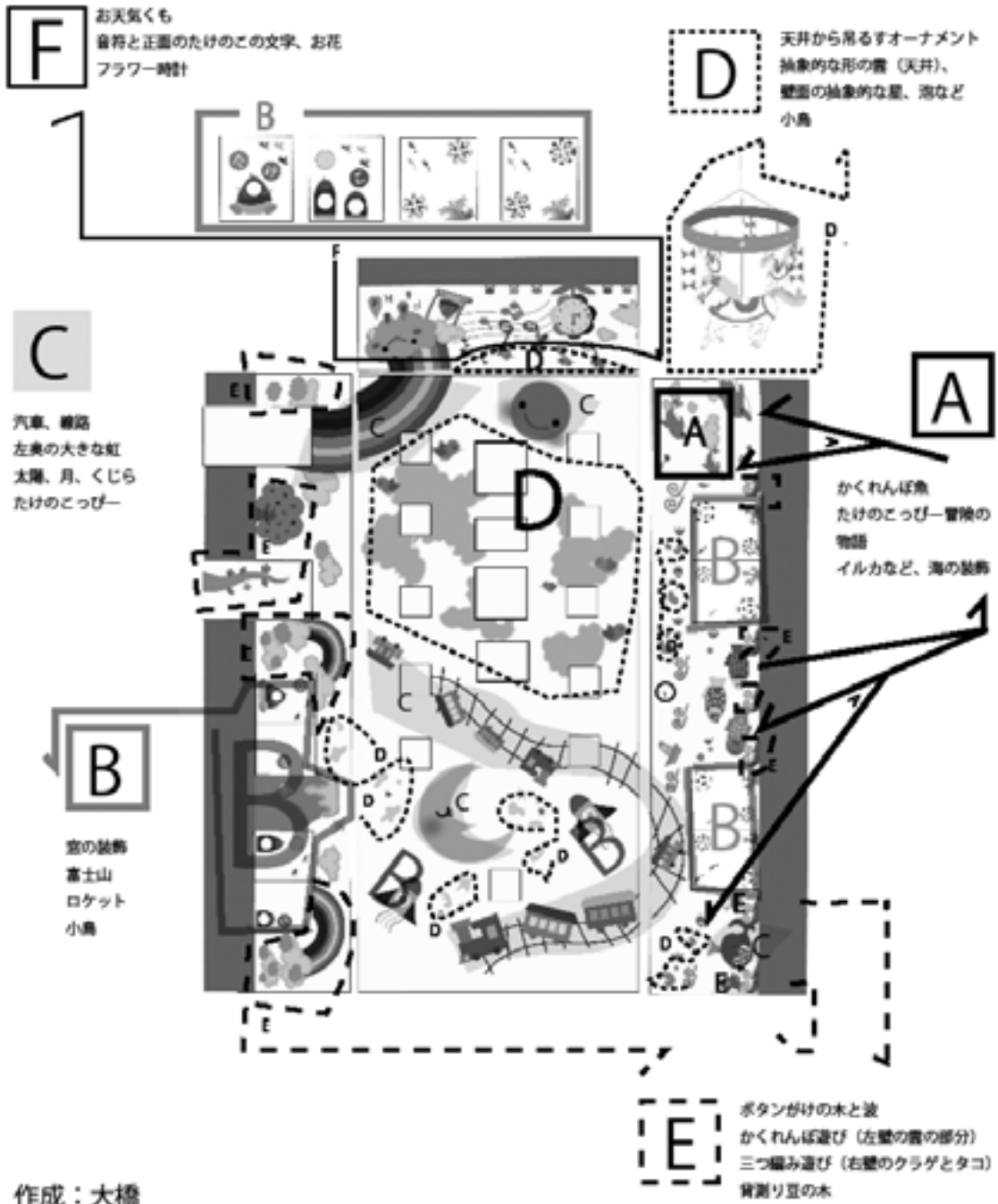
図10に示したように、各グループのテーマや内容の決定については、全グループが時間をかけ思いを込めて構想したものが多かったため、統一テーマに絞った際、制作へのモチベーションがあがらないのではないかと懸念された。しかし、授業当初から統一テーマで実施することの意味を伝えていたことや「ねがい」の部分ではどのグループも共通点が多かったため、自グループの案がメインテーマとして選出されなくてもそれを受け入れて制作にのぞむ姿が見られた。また、今回は全グループのアイデアが融合した最終案となり、制作においても自分たちが提案したアイデア部分を担当してもらうようにしたため、受講生の制作へのモチベーションは下がることなく、制作に繋げることができた。

5) 制作

全体構想および各グループへ配布した制作プリントをもとに、制作を開始することになった。各グループの担当部分については、全体構想を示していたものの、グループ内で創意工夫を行い、原案と大きく変わらなければ、アイデアを追加したり多少変更したりしてもよいとした。結果としては、各グループとも最終案から大きな変更はなく、材料や方法などの点においてそれぞれの工夫を發揮した。制作に必要な材料・用具は、各グループのリクエストを受け、制作中に随時購入しながら、制作を進めていった¹⁵⁾。使用した主な材料・用具については、図15に示した。制作過程で新たに使用したい材料や用具が増えていき、最終的には幅広く様々な材料・用具を使用することになった。制作は、グループで話し合いながら進めていった（図16）。活動は、主に「たけのこ」で行い、制作した作品を掲示しながら進めていった。制作では、グループ同士の作品のバランスや調和などを考える必要があったため、各グループがお互いの進行状況の把握したり、作品に使用している材料や用具、工夫などを交流したりすることが求め

たけのこ制作場所分担表

～冒険の国へ～



作成：大橋

図13 各グループのアイデアを融合した最終案（学生作成）



図16 「たけのこ」での制作風景



図17 「たけのこ」室内装飾の様子（上から1～3段目：教室側面部，上から4段目：教室天井部）



図18 フェルトをめくるしかけのある作品

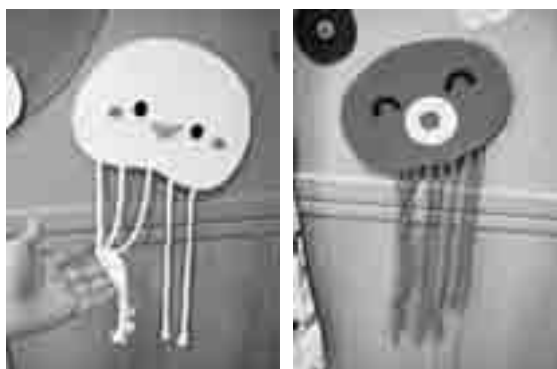


図19 ひもで三つ編み遊びができる作品

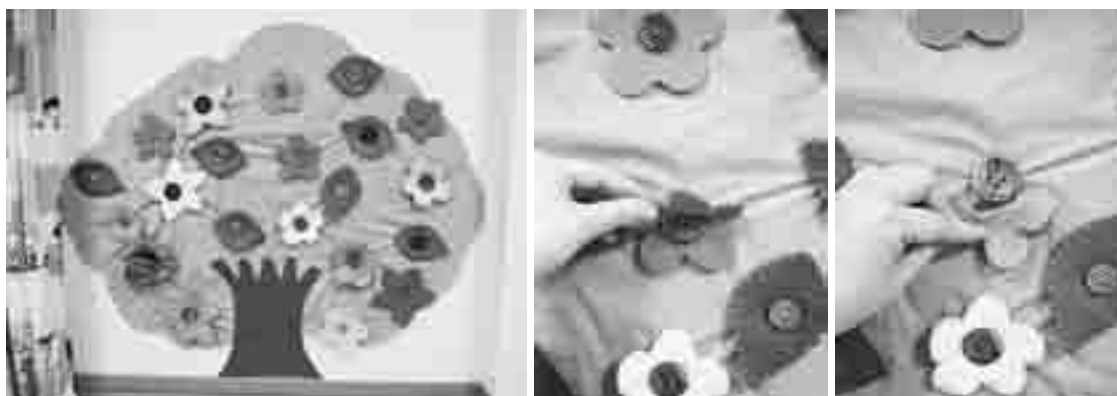


図20 ボタンや布、フェルトを使用した「ボタンかけの木」

これらの回答から、教室環境づくりが単に教室を飾る・彩ることではなく、子どもにとって教育的な意味があり、子どもの成長に深く関わる要素であることに気づいている様子が窺える。教室環境の役割（意義）について理解が深まったため、自分本位に教室環境をつくるのではなく、子どもを中心に置いた教室環境づくりを行わなければならないと感じている受講生がいた。また、自分が教員となり現場に立った時に、子ども達の発達段階（年齢）に合った教室環境づくりを行っていきたいと述べている受講生もいた。掲示物を単に掲示するだけでなく、教室環境づくりの意義について実践を通して考えを深めていくことができたといえる。授業前半に、問題意識を自分で考察する活動を取り入れたため、教室環境づくりの目的や問題意識が受講生の中にしっかりと生まれものと考えられる。

(2) 教室環境づくりのプロセスと方法に関する学び

2つ目の成果としては、教室環境づくりのプロセスと方法を学ぶことができた点があげられる。教室環境づくりのプロセスと方法を学ぶことは、本実践の大きな目的の一つであった。先と同様の問いの中に、以下のような回答があった。

- ・教室環境の重要性は感じていたが、実際に自分で取り組んだことで、具体的なイメージを思い描けるようになった。もっとこうしたいという願いも生まれてきた。
- ・問題意識を自分で考え持ちながら、教室環境づくりのプロセスを学べた。
- ・教室環境づくりに取り組んだのが初めてだったが、今回対象者についてしっかり考えたこと

で、今後小学校・中学校にも応用していけると思う。

- ・教室環境づくりについて、様々な方法を知り、概念が広がった。
- ・使用できる材料に関する認識が広がった。
- ・自分が教員になった際、学んだ色々な材料や方法、技法などを用いて、教室環境づくりを試みたい。
- ・単なる可愛く面白いものをつくるだけでなく、安全面について配慮することも大切である。
- ・沢山の材料や方法を組み合わせるといふプロセスが現場でいかせそう。
- ・今回は対象が乳児から小学校6年生までだったが、例えば中学校の教員になったとしても、今回のプロセスや方法をもとに自分の問題意識を持って教室環境づくりに取り組んでみたい。
- ・教室環境を考える機会があまり無かったので、使用する素材としては主に紙を考えていた。しかし、紙以外の素材と出会い、様々な素材の魅力に気づく事ができた。 など

本実践では、教室環境づくりの方法やプロセスを学ぶために、図5に示したプロセス（活動）を授業内に意図的に組み込んでいった。また、このプロセスを個人とグループにおいて繰り返していくことで、受講生が先にあげた教室環境づくりの意義（目的）を認識するだけでなく、目的を踏まえた教室環境づくりのプロセスや方法について学びが深まったといえる。プロセスや方法を検討することを通して、「もっと〇〇したい」という願いが以前よりも膨らみ、プロセスや方法を具体的に思い描けるようになったという感想もあった。夢や課題を自覚し、それを実現するプロセスや方法を学んだ本実践での経験が、受講生が教員になった際、いかしていけるものとする。

(3) 共同活動からの学び

本実践では、活動過程でグループでの活動を取り入れ、様々な専攻・専修の受講生と交流ができる機会を設定した。授業の感想には、以下のように共同活動からの学びについての指摘も多々見られた。

- ・色々な学科の仲間と取り組んだことで、教師環境づくりに対する自分の思考過程を再確認するとともに、新しい気づきがたくさんあった。
- ・自分達の案がどうすればよくなるのかをグループで考えることが大変だったが、人と関わる能力は今後も必要ものだと思う。
- ・他学科の仲間と重視するポイントが違ったことで、教室環境づくりが深まった。
- ・グループ活動を通して、自分の役割を再認識した。
- ・共同活動を通して、新しい考えや価値観が生まれることが分かった。
- ・仲間と共に目標に向かって成し遂げる達成感を感じた。
- ・それぞれの専門性が色々な場面（問題意識、材料や用具の選択など）でいかせた。

これらの回答にもあるように、グループや全体での活動を通して、仲間の良さをいかしながら共に活動していくことに魅力を感じている受講生が多いことが分かる。個人で活動するよりも、グループや全体で活動することは大変さを伴う。しかし、仲間の価値観や専門性などに触れ、問題に対する視野の拡大や新たな価値観を創造することも可能である。実際に、受講生の

感想の中には、その活動過程において相互理解や共同活動の難しさを感じてはいるものの、今まで自分が気づけなかった様々な視点から物事を捉えられるようになったとの声が多く聞かれた¹⁶⁾。本実践を通して学んだ事のひとつとして、様々な専攻・専修の学生と一緒に取り組んだことをあげる学生もおり、グループワークの大変さとその重要性を改めて感じたところである。教育現場でも仲間とコミュニケーションを行いながら、様々な事に取り組んでいくため、その意義や価値を学部段階で学ぶことは重要なことであると考えられる。学生のもの見方・考え方などの視野の拡大や新たな価値観の創造は、多角的な視点から問題を捉える力および分析力の向上やそれに伴う教材研究の能力にもつながっていくといえよう。

(4) 今後の課題

本実践では、室内装飾完了後に、学内の先生方や事務の方々、授業の受講生が「たけのこ」に集まり、室内のお披露目会が開催された。これは、男女共同参画室の担当教員が企画を行ったものである。参加したメンバーで「たけのこ」の室内装飾を鑑賞していった。今回、採用になったメインテーマに合わせて絵本を作成しており、その絵本を学生が読み聞かせながら、来場者に室内装飾のコンセプトを説明した。お披露目会を通して、制作者や「たけのこ」に関わる大学スタッフなどと共に室内装飾の意味や出来栄を共有することができた。しかし、実際に完成した室内装飾の中で、利用者である子どもが活動している様子を制作者である受講生に詳細に伝えることができなかった¹⁷⁾。受講生からは、問題意識を持って制作した室内装飾が子どもにどのように活用されたのかを知りたかったという声を聞いた。授業過程における評価のみならず、授業後の評価に関しても、今後どのように受講生にフィードバックしていくか検討していかなければならない。今回の学びをもとに、小学校や中学校の教室環境を検討してみるなどの新たな課題にも挑戦できるだろう。本実践の学びがいかせる課題を如何に授業に位置づけ構想していくかはこれからの大きな課題といえる。

5. おわりに

本稿では、授業や学級における教室環境づくりに着目し、学生がその環境づくりの方法やプロセスを学ぶための授業提案を行い、その成果と課題について報告を行った。大学の施設と連携して実践を行うことや授業構想を計画的に構築することで、受講生の学びが深まったことが考察できた。これらの成果と課題をもとに、今後もこれからの教員に求められる資質能力を学部段階で育てていくために、より充実した授業提案を行っていき、その在り方を探っていきたい。

【註】

- 1) 平成20年度までは、「美術教育研究A」と「美術教育研究B」の授業が開講されていたが、平成21年度より「美術教育研究」となり開講されている。
- 2) ここで示している授業科目は、静岡大学教育学部が発行している、平成24年度入学生用の学生便覧に掲載されているものである。
- 3) 教職に関する科目は、第二欄～第六欄に分類されており、図1に示されている授業科目は第四欄に位置付けられている。現在、筆者が担当している授業科目は「美術科教育法Ⅱ」

「美術科教育法Ⅳ」「美術教育研究」である。第四欄には、この他に「教育課程と方法」「道徳指導論」「特別活動論」「生徒指導」「教育相談」が示されている。

- 4) ここで想定する教室とは、普通教室および図画工作室、美術室などの特別教室を対象とする。
- 5) 教室環境に関する内容については、実際の教室環境（机の配置や材料・用具の管理、掲示の様子など）をスライドで示しながら、教室環境づくりの重要性について語るのみに留まっていた。
- 6) 静岡県教育委員会では、初任者研究資料をHP上で公表しており、閲覧者がダウンロードし印刷できるようになっている。資料は全156ページとなっており、小・中学校における教育活動や特別支援教育、養護教諭の職務内容など全7章から成り立っている。第1章の小・中学校における教育活動の中では、活動内容が第1節から第22節にわたって具体的に示されており、教員が理解すべき仕事内容が多岐にわたることが理解できる。静岡県教育委員会HP <http://www.pref.shizuoka.jp/kyouiku/index.html>（施策情報「教職員」の「資質向上」のページに平成24年度の資料が掲載）
- 7) 文部科学省「教室等の室内環境の在り方について」（中間報告）、学校施設整備指針策定に関する調査研究協力者会議、平成17年9月
- 8) この中間報告では、主に「天井の高さ」の在り方について検討が進められている。この報告を受け、同年12月には「教室等の室内環境の在り方について－天井の高さを中心として－」が示されている。
- 9) 高橋智子「授業実践力を持った造形・美術教育教員養成のためのカリキュラム検討－附属中学校との連携協力による授業実践の試み－」静岡大学教育学部附属教育実践センター紀要No.15, 2008, p.27-36
前報では「美術教育研究」（前「美術教育研究A」）で実践した附属中学校との連携授業を通して、自ら授業を計画し実践できる力を持った教員を養成のための教員養成課程における教科教育のカリキュラム検討を行い、その成果と課題を報告した。
- 10) 授業計画では全8回であったが、授業時間外での取り組みもあった。実際に「たけのこ」の室内装飾が完成したのは、8月上旬であった。
- 11) この課題は、授業外に取り組む課題として受講生に課したものである。十分に問題意識が深められておらず、解決策（図工室の教室環境の提案）についても追求されていなかったため「教室の真ん中に大きな木を設置する」や「木製の大きな机に入れ替える」などのハード面を中心とした現実的には実現不可能な例が多々見られた。
- 12) 鹿毛雅治 奈須正裕編「学ぶこと・教えること－学校教育の心理学」金子書房、2007, p.31
- 13) 文部科学省「中学校学習指導要領解説 美術編」日本文教出版、平成20年9月, p.81
- 14) 参考資料（文献）には、幼稚園・保育園の壁面や室内飾りが紹介（材料・用具・方法など）されている以下の6冊を使用した。この文献の提示により、掲示の工夫に関するアイデアを広げ、実際の掲示に応用したグループもあった。
 - ・ 嶋津由美子編「プリプリ4月号」世界文化社、2011
 - ・ ひかりのくに編集部「年齢別 子どもと作れるアイデア45点 使える！アレンジ43点 かわいい壁面12カ月」ひかりのくに、2011
 - ・ 大屋佳子編「Gakken 保育 Books ピコロの壁面アイデア12カ月」学研教育出版、

2010

- ・浅野ななみ監修「かわいい！楽しい！壁面実例12カ月」成美堂出版，2010
- ・寺西恵理子監修「アイデアいっぱい！！壁面&室内飾り」成美堂出版，2011
- ・ユーキャン学び出版 スマイル保育研究会「U-CANの保育スマイルBOOKS U-CANのスマイル壁面12カ月」ユーキャン学び出版，2010

- 15) 材料費については、静岡大学男女共同参画推進室から室内装飾用の予算（約3万円）が組まれた。
- 16) 例えば、美術科の学生は教室環境について「何を」（方法）つくるかの視点で考える傾向が強く、他学科の学生は「誰に」（対象）、「何のために」（目的）を軸として教室環境を考える傾向が強かった。幼児科の学生は子どもの発達段階等を踏まえながら方法を検討しようとしていた。また、材料や方法に関する知識や能力も違うため、素材に対して家庭科の学生が布やフェルトの提案やその使い方などをメンバーに伝えている場面や幼児教育の学生が乳児および幼児の発達段階を踏まえ、遊びの意味についてグループで考える場面などが見られた。美術科の学生は材料をもとに形を生み出していく技能に優れており、こうした違いに気づくことで、自分の課題の捉え方や価値感を振り返ったり材料や方法について学んだりすることができたと考えられる。
- 17) 「たけのこ」の担当教員より、授業者に「たけのこ」を利用している子どもが室内掲示で遊んでいる様子などがメールで伝えられたため、その様子を受講者にもメール（文章）にて周知した。